

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

ベトナムで「あなた」と「わたし」は難しい (巻頭言 No.130)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2014-03-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 樫永, 真佐夫 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5088

ベトナムで 「あなた」と「わたし」は難しい

国立民族学博物館
研究戦略センター・准教授
かしなが まさお
榎永 真佐夫



「どこの国の人?」、「何歳?」、「何をしているの?」、「結婚は?」、「子どもは何人?」……。ベトナムを訪れた日本人は、初対面の人と会うたびに、こんな質問攻めにあう。「いきなり年齢を聞くなんて」と憤るご婦人も多い。しかし、これが、ベトナム語でコミュニケーションをとるために不可欠の質問と知れば、我慢するしかない。

ベトナム語は難しい。例えば、「こんにちは」は、「チャオ」に相手へ呼び掛けるための二人称代名詞を付け加える。しかし、実は、ベトナム語には英語のyouに相当する中立的な人称詞がない。自分が男性で相手が同世代の年長男性なら、相手を「兄」、自分を「弟」と呼ぶ。また、相手が自分の父より少し年上の女性なら、相手は「伯母」で自分は「甥」だ。このように、原

則として、相手の性別、年齢に対応した親族呼称を二人称とし、一人称もこれによって決まる。さらに、呼称は社会的な地位によっても変わる。年齢だけで判断すれば「兄」くらいでも、相手の社会的地位が自分よりうんと高ければ、「伯父」にまで持ち上げることもある。3人以上の会話になるとさらに厄介だ。全員がエライという前提の学者の会議などでは、男性は「翁」、女性が「婆」で統一して始まるが、それも最初だけで、親密さが増すにつれて呼び方を変えていく。また、グー・チョキ・パーの様な三すくみの関係ともなると、お互いのやり取りの中、落ち着く先を探し出さねばならず、そのためには、巧みに「空気を読む」という技能が欠かせない。かくして、ベトナム語初學者は、複雑な親族呼称を覚えることに苦勞し、実践でさらに苦しむことになる。

呼称が決まるということは、人間関係も決定するということだ。ベトナムにも、学校の同級生が、「オレ」「おまえ」と呼び合う遠慮のない対等の関係はあるが、これは稀な例。一般には、二人いれば一方が目上でもう一方が

目下になる。日本人には堅苦しく思えるが、一旦、親族関係を擬した人称詞で呼び合う関係が確立すると、他人行儀ということがなくなり、あたかも実際の家族や親族のように近しく要求をぶつけ合うことが可能になる。

このような人称詞の使い方は、一見、血縁を重視する儒教的規範が強いベトナム人の行動原理とも関係ありそうだが、タイやラオスでは儒教的規範が大して強くないのに、人称詞の使い方はベトナム語と同じだから、即断はできない。ただ、長幼の序を尊び、身内が強い絆で結ばれている社会には、この言語が極めて都合が良いのは確かである。

(略歴)

1971年兵庫県神戸市生まれ。2001年東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻(文化人類学)博士課程単位取得退学。博士(学術)。現在、国立民族学博物館准教授。ベトナムに住む黒タイの文化と社会の歴史を中心とする研究をおこなっている。単著に『黒タイの年代記-「タイ・プー・サク」』、『ベトナム黒タイの祖先祭祀一家霊簿と系譜認識をめぐる民族誌』、『東南アジア年代記の世界-黒タイの《クアム・トー・ムオン》』がある。そのほか英語、フランス語、ベトナム語、黒タイ語でも著書、論文、エッセーなどを執筆。第6回日本学術振興会賞受賞。